

中央ユーラシアの英雄叙事詩 『チョラ・バトゥル』の地域的特徴再考 ノガイとカラカルパクのヴァリエーションについて

坂井弘紀 所員／表現学部講師

—はじめに

『チョラ・バトゥル』は、東はカザフ草原から西はアナトリア、バルカン半島におよぶ地域のテュルク系諸民族（カザフ、カラカルパク、ノガイ、バシュコルト（バシキール）、カザン・タタール、チュヴァシュ、クリミア・タタールなど）に伝えられる英雄叙事詩である。16世紀に実在したカザン・ハン国の有力者チョラ・ナリコフを主人公に、クリミア・ハン国やロシアを交えた国際情勢を背景とし、1552年のロシアによる首邑カザン征服までを描いた作品である。この作品は、テュルク系諸民族の代表的な叙事詩作品として、他の叙事詩と同様に口誦により代々伝承されてきた。その多くは韻文と散文が混交しているが、韻文あるいは散文のみのテキストもある。またその規模も数十行から六千行以上とさまざまである。

『チョラ・バトゥル』は、他の多くのテュルク系叙事詩と同様に、19世紀後半になってはじめて採録・刊行された。以後、ロシア・ソ連を中心にトルコやルーマニアでも採録され、公刊されている。ところが、『チョラ・バトゥル』の多くのヴァリエーションにおいて、主人公が戦う敵をロシアとしていることなどから、そのテキストがソ連時代に出版されることは少なく、むしろさまざまな弾圧を受けてきたのである。

ペレストロイカ期やソ連崩壊以降、徐々にさまざまなヴァリエーションが出版されるようになったが、それらを包括的に扱い、比較・対象した研究はほとんどない。筆者はかつて、叙事詩『チョラ・バトゥル』の19のヴァリエーション^①を詳細に分析し、この作品の特徴を指摘するとともに、この作品が大きく二つに分類できることを指摘した^②。本稿では、それ以後に行なった現地調査などで新たに入手することができたノガイとカラカルパクのテキストを紹介するとともに、これらのテ

（1）表3 テキスト一覧を参照のこと。

（2）「テュルク英雄叙事詩の地域的特徴——『チョラ＝バトゥル』の分類をもとに」『地域研究論集』第3巻第2号、国立民族学博物館地域研究企画交流センター、2000年。

キストについて上記の研究手法と同様の作業を行ない、先にくだした分類方法が妥当であるかを再検討し、先の論文には取り入れることができなかったヴァリエントにはどのような特徴があるかについて論じていきたい。

なお、本稿で用いたノガイとカラカルパクのテキストには、それぞれ『ショラ・バトゥルШора Батыр/Шора баатыр』、『エル・ショラ Ер Шора』との題が付してあるが、便宜上、ここではこの作品を『チョラ・バトゥル』と統一して表記する。また、主人公の名は、ノガイ語およびカラカルパク語では「ショラ」であるが、テキスト中を除いて、「チョラ」に統一する。

1——先行研究から

筆者は、かつて『チョラ・バトゥル』について次のように論じた。すなわち『チョラ・バトゥル』の諸ヴァリエントの特徴を明らかにした上で、1.あらすじ・モチーフ、2.登場人物・固有名詞、3.歴史事象に関する描写、4.現れる地名の4つの観点から、それらを

I. (1) クリミア・ドブルジャ、(2) ヴォルガ川流域・北カフカース

II. カザフ草原・シル川流域

と二つのグループに分類した上で、次のようなことを指摘した。

まず、「エピソード・モチーフ一覧（表4）」に示したように『チョラ・バトゥル』の基本的なモチーフや登場人物はどのヴァリエントにもほとんど共通しており、カザフ草原から黒海沿岸ドブルジャ地方までのユーラシアの広範囲のテュルク系民族に共通の文化遺産として伝えられているものの、物語の結末や敵民族についてはカスピ海を挟み東西で大きく異なっていることである。グループIの地域（クリミア・ドブルジャ、ヴォルガ川流域・北カフカース）においては、16世紀前半のロシアによるカザン侵攻とそれを防戦しようとするタタールの様子、1552年のカザン陥落が描かれており、それがこの地域のひとびとに代々伝えられてきた。つまり、クリミアやドブルジャなどでは、彼らのその後の歴史にロシアが大きく関係したために、ロシアとの関係史において重要な事件であったカザンを巡るロシアとの攻防が伝えられてきたのである。

それにたいしてグループIIでは、カザンを侵攻したのはロシアではなく、カルマク（モンゴル系のオイラト族）となっている。これは、モンゴルの遊牧国家ジュンガルの侵カスピ海以東、カザフ草原・シル川流域への攻撃が苛烈であったためであり、これに先立つロシアのカザン侵攻よりも重要な問題であったためであると考えられる。このように叙事詩は歴史を伝えているものの、同一作品であっても、それが「具体的な歴史事件」である場合と「抽象的な歴史的イメージ」であ

る場合とがあるのである。作品が伝えられている地域の歴史的背景や歴史観がそれぞれのヴァリエントに顕著に現れているのである。

またナリク・チョラ父子と「タマ」という部族集団との関係が深いことも明らかにになった。タマという部族集団は、カザフの小ジュズなどテュルク系民族の下位集団として知られる。カザフやカザン・タタール、クリミア・タタールなどの民族形成を考える上でも、タマは重要な意味を持つ集団であるといえよう。

さて、先行論文で筆者が示した分類にしたがえば、北カフカースに居住するノガイのヴァリエントはグループⅠに、またカラカルパクのヴァリエントはグループⅡにそれぞれ分類されると推測される。では、この推論が正しいか否か、先行論文では検討することができなかったノガイおよびカラカルパクのヴァリエントについて詳しく検討していきたい。

2——『チョラ・バトゥル』のノガイ版テキスト

まず、ノガイのヴァリエントを取り上げる。ロシア連邦、北カフカース地方のテュルク系少数民族ノガイに伝わる『チョラ・バトゥル』のヴァリエントは、管見の限り二つ存在する。一つは先行論文においても取り上げたオスマノフ・マゴメト・エフェンディなる語り手のものであるが、このノガイ語テキストの存在は確認できず、先行論文ではトルコの研究者イナンによるものを利用した。このテキストのあらすじ(表3:⑬)をあげておこう。「ダゲスタンのカドゥ・ベイ・ミルザに育てられたナリクはメンリ・スルと結婚し、チョラが生まれた。チョラはある日、クリミアのアリベイが家族を侮辱したため、彼を殺し、カザンへ逃亡した。カザンではロシアとの戦争が行なわれており、チョラも加わった。ロシアの女奴隷との間に生まれた自分の息子を戦場で殺したチョラはカザン近郊のカラス川に入水して自らの命を絶った。」

もう一つは、モスクワで1969年に刊行された『ノガイ民族の詩歌』所収のテキストである。これは1926年にカラ・ノガイの語り手アジ・モッラ・ノゲマノフの語りを研究者ジャニベコフが書き取ったものである。若干の散文を含む、およそ600行からなる韻文作品である。このテキストは、先行論文では利用できず、後に入手することができたため、ここで検討していきたい。まずはあらすじを見よう。

A. ノガイ版叙事詩テキスト(ノガイ語)

クリミアにアクタジュのアリ・ビーなるビーがいた。たいへん頑固な性格であった。ある日、国はずれに住むショラの父である老ナリクのもとにやってきた。ナリクは彼をもてなそうと考え、天幕に座らせ、食事にはよく肥えた羊を屠ることにし、飲み物にはアラク(蒸留酒)と蜜酒を供することにし

た。しかしアリ・ビーは天幕に座りもせず、羊も食わず、酒も飲まず、馬上から叫んだり、いばったりしているだけだった。何をしても決して受けようとはしなかった。それどころか鞭を頭に当て、刀を首に当て、ショラの母メンリ・スルーには心から消えぬ罵声を浴びせ、妹リャリュには鉄よりも冷たい言葉を発し、さらにはショラの愛馬カラゲルを持ち去ってしまった。そのことをナリクから知ったショラは激怒し、アリ・ビーのもとへ行き、苦情を訴える。アリ・ビーはショラの声聞き入れない。ついに弓矢での戦いが始まった。ショラの射た矢はアリ・ビーの胸を貫き、彼は大きく倒れた。

ハンの家来を殺してしまったため、クリミアの地に留まることができなくなったショラは逃亡の準備をする。どこへ逃れようかと考えていると、カザンの国に行く夢を見た。そこでカザンへ逃れることにした。両親に別れを告げ、どうにかカザンにたどり着いた。

カザンではハンの宮殿に暮らすことは許されず、町外れのサリという名の老人の下で過ごすことになった。そこで9年間過ごしたころ、サリ老人がショラを勇士の集いに誘った。サリ老人は「この集いにはさまざまな勇士がいる。そこにはイバンがいた。またママイがいた。訳も分からず移ってきたノガイがいた。そのハンはカンバルであった。山にはカズ・ミルザがいる。そしてサリのもとにはショラがいる」と歌った。勇士たちはショラを見なかった。ショラは怒って、「カザンを敵が襲ったら、何をすべきかを私は知っている」と叫んだ。すると「宮殿の前にやってきたカラゲル馬に乗っているナリクの息子とはおまえのことだったのか!」と聞いて、勇士の一人クルンシヤクはこれを恥じ、詫びた。ショラは「このカザンのために」と誓った。

それからショラはサリ老人の家に帰り、過ごしていた。そのころ、クリミアに残してきた父ナリクはハンにより罰せられ、乞食をさせられていた。ナリクは乞食になってさまよい、カザンにやってきた。ショラは父に十分施して、故郷に帰した。

敵がカザンに攻めて来た。この戦いでショラは騎士たちと戦い、カラゲル馬とともにエディル川（ヴォルガ川）に沈んでしまった。

ある日、ショラの母が息子の消息を尋ねてカザンにやってきた。多くの人にショラのことを尋ねて回った。しかし、カザンでは統治者が変わっており、ショラのことを知っているものはもういなかった。一人アブル・カスムという修行僧だけが、ショラのことを知っていた。「あなたのご子息勇士ショラは、18年間このカザンで勇姿を示した。勇士の栄光をとどろかせた。彼の最期は、かわいそうに、川に沈んで死んだのです」。すると母メンリ・スルーは「わが子よ、この世にいないのか。これからいったいどうしていこう。子どもをなくしたラクダのように、悲しく泣いて過ごしていこう」と悲しんだのだった。

『チョラ・バトゥル』の大部分のヴァリエントは、チョラの父ナリクの物語から始まる。その多くはナリクとその妻との出会いと結婚についてであり、ナリクが妻となるべき女性を探し求める旅に出て、ついにふさわしい女性を娶るエピソードが中心である。ノガイの上述のテキスト（表3の⑬）に示されるように、ナリクにかんするエピソードは、その後のチョラの活躍と並んで大きな柱となり、ナリクについてのエピソードに欠けるヴァリエントは表2が示すように少ない。上記のノガイのテキストAではこうした両親にかんするエピソードが欠落しており、ナリクの実感が弱く感じられる。本来、ナリクとその妻との逸話があってそれが欠落したのであるが、それでもチョラの父母や妹は重要な登場人物として描かれる。

為政者あるいは徴税者アリビーのナリクらへの強圧的な態度やチョラとアリビーとの戦いはこの作品のほとんどのヴァリエントに共通して描かれるモチーフである。愛馬を奪われたチョラとアリビーとの決闘は、テキストAでは弓矢によって行なわれ、チョラの勝利に終わる。このアリビーとの戦いはこの作品における主柱の一つである。

支配者の一人であるアリビーを殺したことで、チョラはクリミアにすることができず、家族と別れてカザンへ行く。カザンにはたくさんの著名な勇士がいるが、チョラも彼らと並んでカザンを攻める敵と戦う。カザンにおける外敵との戦いは、この作品のほとんどのヴァリエントで語られ、物語のクライマックスとなっている。

『チョラ・バトゥル』のもっとも際だった特徴は、ヴァリエントによって、主人公チョラの運命が大きく異なることである。すなわち、主人公が川に沈んで死ぬヴァリエントと帰郷し大団円で終わるヴァリエントとの二つのパターンがあり、物語の性格を大きく特徴づけている。多くのカスピ海以西のヴァリエント^⑬では、チョラはヴォルガ川で死んでしまうが、カスピ海以东のヴァリエントでは無事に故郷へ帰郷することが多い。ノガイのテキストAも主人公チョラが敵に敗れ、ヴォルガ川に沈み、戦死してしまう。これはまさにグループIの特徴に合致するものである。作品最後の母が息子チョラを探しまわる場面、息子の死を知り、悲しみ嘆く場面は、この作品の悲劇的な性格を一層際立たせている。母が息子の悲惨な最期を悲しみ、幕を閉じる作品は『チョラ・バトゥル』のみならず、テュルク世界に少なくない。

3——ノガイの昔話『ショラ（チョラ）・バトゥル』

『チョラ・バトゥル』は基本的に英雄叙事詩のジャンルで知られているが、中

(3) 具体的には、クリミア・タタール、トルコ、ダブルジャ・タタール、カザン・タタール、ノガイなどに伝わるヴァリエント。

には英雄叙事詩から昔話のジャンルに変容した作品もある。ノガイにはそのような昔話として伝えられるショラ・バトゥルの伝承がある。この昔話のインフォーマントは、北カフカースのオルジョニキーゼ地方（当時）⁽⁴⁾ のカラ・ノガイ地区に住むイマム・ムルザエフという35歳（1940年頃）の荷馬車の御者で、ほぼ文盲であったという。彼が叙事詩の語り手ではなく、一般庶民の労働者であることは興味深い。他のヴァリエントの語り手の多くは、豊富な叙事詩の知識と高い能力をもった専門的な語り手であるからである。まず、簡単なあらすじを見てみよう。

B. ノガイの昔話テキスト（ノガイ語、カラ・ノガイ方言？）

ショラ・バトゥルに名馬があった。この馬をアフタルシュのアリビーが来て、彼の父を殴ったうえ、奪っていった。彼の父は言った。「アフタルシュのアリビーがやってきて、宿営地に天幕を訪ねてきて、天幕に入りもせず、馬肉も羊肉も食べなかった。アフタルシュのアリビーは他のものに目をやり、私の好意を踏みにじっていった」と。

そこでナリクの息子ショラはアリビーを追った。この二人が対峙した。アフタルシュのアリビーは「余はムルザ（貴族）である。先攻の権利は余にある」と言った。ショラはアリビーに先攻の権利を与えた。胸をはだけて矢を射よと立ちふさがった。アリビーが射ると、ショラは斧を胸に当てたため、矢は刺さることなく大地に落ちた。そしてショラは「こんどは私の攻める番だ」といって、アリビーを攻めた。ショラの矢はアリビーに当たり、彼の命を奪った。

ショラは故郷を離れ異郷の地クリム（クリミア）に向かった。自分の名馬に乗って、あるアウル（宿営地）に着いた。彼が名馬に乗り、手には鳥をもっているのを見て、古老たちは「これはミルザなのか、平民なのか」と疑問に思った。するとある娘が「私が聞いてくるわ」と言った。この娘は蜜酒を与えながら、「錦のシェクペン（外衣）を身に纏い、手には鳥をもって、閣下よ、どこに行くのですか？」と尋ねた。ショラは「私は貴族ではない。ただの平民だ。ナリクの息子ショラ。私はクリムに行くところなのだ」と答える。クリムに着くと、彼が勇士であることを誰も知らなかった。あるユルタ（天幕）に入り、彼は自分の心境を歌った。

ある時、クリムの勇士たちが戦場に向かうことになった。彼らの皇帝の妻が、彼らに刀を与えた。ショラには小箱を与えた。彼はこのことに腹を立て、戦場には行かなかった。それを妃は知って、ショラに「箱の中に何かがあるか見よ」と言った。そこには鞘に入った刀があった。この刀を取り、ショラはデヴ（巨人）に向かい、一網打尽にしたのであった。

(4) 現在のロシア共和国スタヴロポリ地方、あるいはダゲスタン共和国北部地域。

この作品は叙事詩とは異なり、8行の韻文をのぞき、ほとんどが散文からなっている。このテキストBは、叙事詩のいくつかのポイントが発展し、簡略化され、昔話として人びとに伝えられたものと考えられる。具体的には、アリビーとの戦い、妃から授かった贈物を巡る話の二点が叙事詩から抽出され、シンプルな物語を構成している。叙事詩の他のヴァリエントと昔話である作品Bとの最大の違いは、主人公のチョラが故郷を捨てて向かう先が、カザンではなくクリミアである点である。カザンを舞台にロシアとの戦いをテーマとしている『チョラ・バトゥル』では、チョラがカザンに行き、敵と戦うことがどのヴァリエントにも共通する。この作品において、チョラの行き先がカザンではなくクリミアへと変化していることは、昔話に変容したことで、この作品が叙事詩としての本来のテーマが失われていることを意味している。叙事詩には歴史性や民族の命運が色濃く映し出されており、昔話にはそれが稀薄であることは一般的に指摘されることであるが、こうしたジャンルの特徴がこの作品にも見て取れるといえよう。

さてこのテキストの特徴は物語の結末が敵を打ち破って終わる点にある。上述のように、『チョラ・バトゥル』には二種類の結末がある。テキストBは、主人公の死でも主人公の凱旋でもなく、ただ敵への勝利がうたわれるだけである。つまり、いずれの結末とも異なるが、グループⅡに近いものとは言えるであろう。

4——『チョラ・バトゥル』のカラカルパク版テキスト

次にウズベキスタンの少数民族カラカルパクに広がる『チョラ・バトゥル』について見てみよう。現在まで5つのヴァリエント^⑤がカラカルパクで採集されているが、それらは長い間公刊されず、この叙事詩のカラカルパク版は1995年になってはじめて出版された。『チョラ・バトゥル』のカラカルパク版が長い間公刊されなかった理由として、カラカルパク版テキストの編纂者は「人びとの希求にもかかわらず、ソビエト時代には、その内容がイデオロギー的側面から歪められ、公刊することが妨害されてきた」としている^⑥。『チョラ・バトゥル』のカラカルパク版についての具体的な論考は、先行研究においてほとんどなされておらず、カラカルパク版についての言及さえもこれまで数えるほどしかなかったが、これは上記の事情を鑑みると致し方ないことと言えよう。

これまでに採録されているカラカルパク版の5つのヴァリエントは、あらすじについてはそれぞれ互いに類似しているものの、表現方法や規模は多様であると

(5) Нурабылла улы Есемурат жыраў, Нағимов Қарам жыраў, Әтімбетов Сейжан жыраў, Акназаров Жанназар жыраў, Имбетов Өтенияз жыраў の各ジュラウ（叙事詩語り）から書き取ったヴァリエントである。

(6) Ер Шора, Нөкис, Қарақалпақстан, 1995, 2 бет.

いう。

ではまず、1995年に出版されたテキスト⁽⁸⁾をもとに、カラカルパク版のあらすじを以下に記そう。

C.カラカルパク版叙事詩テキスト（カラカルパク語）

ムスリムの国のひとつであるノガイの国に、スルタン＝サンジャル＝マズハンの治世、カラブウラとコギスの息子タマを先祖にもつタマ族のナリクというパイ（富者）がいた。長く子どもに恵まれなかったが、神や聖者に祈った結果、やがて息子と娘が生まれた。息子にはショラと、娘にはグミサイと名付けた。

アグダシュの国のビー、アリ・ビーは、ナリク・パイが息子ショラに与えたオイシュバルという馬を渡すよう家来を送って要求してきた。ショラは、父に鞭打ったアリ・ビーの家来たちの耳を切りとって送り返した。そのため、アリ・ビーは300人の兵士らとともにナリクの国を襲い、家畜などを奪っていった。

これに怒ったショラはアリ・ビーの兵士らに立ち向かい、彼らをことごとく殺害した。ショラはアリ・ビーに罪なき人びとを苦しめたことを詫げるように求めたが、アリ・ビーはこれに従わなかったため、ショラはアリ・ビーを殺したのであった。

ショラはこのあと、カザンにいるノガイのハン、アディル・ハンのもとに向かった。道中、ショラは、羊を放牧していたアディルの息子アイダルと友人になった。実はこのとき、カザンはカルマクのポラト・ハンに支配されており、アディル・ハンは火を放たれ、その息子アイダルは羊飼いにさせられていたのであった。

カザンでポラト・ハンに仕えるダナという大臣は、ショラの知らせを聞いて、家来にショラを捕らえて、連れてくるように命じた。ショラは彼らと戦い、彼らをカザンの町に追い返した。そこでポラト・ハンは、「でか目」のコズバンベトのもつ「邪視の力」によって殺そうと考え、コズバンベトにショラを襲わせた。コズバンベトの邪視からショラを守護霊クズル・イリヤス・ババが守ったものの、ショラの乗っていたオイシュバル馬は邪視によって死んでしまった。

それを知ったオマル・ハンというハンはショラにシュバル馬と武器を与えて、ショラにオマル・ハンの旧年の仇敵、クタイ・コタンの王カラ・ハンを

(7) Сонда, 5 бет.

(8) このテキストは、韻散混交文で、本文は126頁。なお残念ながら、このテキストがどのヴァリエントに基づいているかの具体的な言及はない。

攻めるよう命じた。それに対し、カラ・ハンはティッラ・ハンという勇士を長として、ショラと戦わせた。ショラはティッラ・ハンを殺して、その兵士たちをムスリムに改宗させた。ショラの勇敢さに恐れをなしたカラ・ハンも進んでムスリムになり、自分の敗北を認め、娘アルマハンをおマル・ハンに与えた。おマル・ハンも娘グラユムをショラに与えた。

そしてショラは、スルタン＝サンジャル＝マズハンから許しを得て、再びカザンへ向かった。そこでコズバンベトとボラト・ハンと再び戦い、彼らをついに殺して、カザンのノガイ人たちのもとで羊を飼っていたアイダルをカザンのハンに推挙した。そこで4年間過ごした後、アイダル・ハンから許しを得て、カザンの人びとと別れを告げ、自分の兵士らとともに故郷へ向かった。2カ月と12日の旅を終え、たくさんの戦利品をスルタン＝サンジャル＝マズハンに渡した。ショラはそこで数日過ごした後、ジャイフン川を越えて、ショラハンという町に行き、そこを統治した。

時が過ぎて、おマル・ハンはショラを呼んだ。ショラがおマル・ハンの国へ向かって15日が過ぎたころ、ショラはシュバル馬とともに海で溺れて死んでしまった。

スルタン＝サンジャル＝マズハンは、数カ月後にショラの死を知って、彼を生まれ育った場所ショルルク（ショルシャ）に埋葬したのであった。

このカラカルパク版テキストの冒頭では、チョラの出身集団を他のヴァリエントと同じようにタマとしている。チョラの父ナリクについてはこのタマという集団の出であるということしか言及されていないが、他のヴァリエントと同様に、かつては父ナリクについても語られていたのかもしれない。ナリクについての詳細な叙述は少ないものの、主要な登場人物であることは、ノガイ版をはじめ他の多くのヴァリエントと共通する点である。またアリ・ビーの横暴や彼とチョラとの戦いなどが他のヴァリエントと共通する重要なエピソードであることは既述のとおりである。

それでは、作品の性格を特徴づける物語の結末について、このカラカルパク版テキストではどのように描いているのだろうか。カラカルパク版では、チョラは、一度はカザンから戦利品とともに凱旋帰国するものの、その後、海（теңиз、カスピ海かアラル海？）で水死している。このヴァリエントは、カスピ海以東のヴァリエントに見られる無事に帰郷するエピソードとカスピ海以西のヴァリエントにあるヴォルガ川での「水死」のエピソードとの二つのそれぞれ異なる特徴を兼ねそなえており、グループⅠの地域とグループⅡの地域との間にあるカラカルパクの地理的特徴が現れているようで、たいへん興味深い。

さて、このテキストCの興味深いところは、多くのハンが登場することである。チョラの故郷のハンに加えて、カザンの二人の相対するハンやクタイ・コタンの

ハン、オマル・ハンなるハンとさまざまなハンが入り乱れ、チョラと関わる。他のヴァリエントもクリミアのハンやカザンのハンなどが登場するが、カラカルパクのこのヴァリエントはそれらとは異なる、カラカルパクの独自性を強く感じさせる。また超自然的な描写が多いこともこのヴァリエントの特徴の一つである。

5——登場人物・固有名詞について

『チョラ・バトゥル』の主要な登場人物の名称は、表1が示す通り、基本的にどのヴァリエントも同一である。主人公チョラ（ショラ）とその父ナリクはどのヴァリエントでも同一であり、母の名前もクルカヌス（カザフのヴァリエント）という例があるものの、基本的には同一の名称である。チョラが最初に戦う相手はほぼ例外なくアリ・ビーであり、盟友も同一の人名と言えるであろう。先に見たノガイ版テキストA、Bにも、カラカルパク版テキストCにもこのことはあてはまる。

ノガイのテキストAでは、愛馬の名をカラゲルという。この名はカザン・タタールやクリム・ノガイのテキストにも見られる（表1の⑫、⑬）。このことはカザ

表1 『チョラ・バトゥル』の主な登場人物（丸囲み数字は表3のテキストに対応）

	主人公	父	母	妹	馬	戦う相手	盟友
①	Çora	Narik	Menli Sulu		Tasmalı ker	Ali bey	Qılçaq
②	Çora	Narik	Menli Alu	Kanikay	Tasmalı ker	Ali bey	Kolunçak
③	Çora	Närik	Mängli-Aru-Sulu	Kanıkäi	Tasmaly kär	Äli bi	Kulunçak
④	Çora	Närik	Mängli-Sulu-Aru	Sulu-Bäk	Tasmalı kär	Äli bi	
⑤	Çora	Karip jigir					
⑥	Çora	Narik	Mensulu	Djanike		Alibey	
⑦	Çora	Narık	Meslu		Tasmalıker	Ali biy	Konşak
⑧	Çora	Malik bey	Bengü hanım	Kanikay	Tasmalı kir	Ali bey	Kolunçak
⑨	Şora			Gani Mesru		Ali bey	
⑩	Çora	Narık		Bayan Sılu	Tasma gäri	Ali bäy	
⑪	Şora	Narık		Aysılu	Tasmager	Ali bey	Kulınşak
⑫	Çora	Narang	Minglesılu	Aysılu	Karagir	Gali bi	Kolınçak
⑬	Çora	Narık			Karagir atı	Ali bey	Kolunçak
⑭	Şora	Närik	Mengli Sulu	Şirin	Aktanker		Qulınşaq
⑮	Şora	Närikbay	Qulqanıś		Şubar at	Älibi	Er Tasır
⑯	Şora	Närik	Qulqanıś		Şubar at	Älibi	
⑰	Şora	Närik	Mengdi aru		Taspaker	Älibi	Qulınşaq
⑱	Şora	Närik	Mengdisulu		Taspager		Qulınşaq
⑲	Şora	Nurek					
A	Şora	Narik	Mengli Sıluw	Lyalyu	Karager atı	Ali-biy	Kulınşak
B	Şora	Narig				Albiy	
C	Şora	Närikbay		Gümisay	Oyshbar	Älibiy	Aydar

ン・タタールやクリミアに広がるノガイとの関係の深さを示す。また、チョラの妹としてリャリュという名が見られる。表1からわかるように、この名称はこのテキストに固有のものである。また、カザンにはチョラの庇護者としてサリ老人が登場し、イバンやママイ、カンバル、カズ・ミルザなどの戦士も現れる。ママイやカズはノガイ・オルダの有力者であり、それぞれが他の叙事詩の主人公としてよく知られた人物である⁹⁾。なお、16世紀にノガイ・オルダは親ロシア派と新クリミア派とに分裂したが、ママイとカズはともに親クリミア派として知られ、ロシアと相対したことを指摘しておきたい。

チョラとアリビーという二人の主要人物が登場するものの、テキストBの登場人物は少ない。これはシンプルならすじの昔話というジャンルも関係しているためであろう。

カラカルパク版の主要登場人物の名称は、表記上の若干の相違はあるものの、他のヴァリエントとほぼ共通している。このことは、上述した共通するエピソードとならんで、これらの登場人物がこの作品に欠かせない要素であることを表している。また、主人公の馬の名称は、北カフカースのヴァリエント⑮・⑯と類似していることがわかる。一方、表1・3が示すように、妹や盟友、故郷のハンやカザン＝ハンの名称は、他のヴァリエントとはまったく異なっており、このヴァリエントの独自性が際立っているといえよう。

6——「敵民族」について

『チョラ・バトゥル』では、ほとんどすべてのヴァリエントで敵がエディル（ヴォルガ）川の都市カザンを攻撃するが、カザンを攻める敵は大きく二つに分けられる。それはロシアとカルマクである。こうしたことから、筆者はかつて、『チョラ・バトゥル』のヴァリエントを分類した際のポイントの一つとして、敵民族がロシアであるか、カルマクであるかといった点を挙げた。その結果、敵を具体的に明言している場合、カスピ海以西のヴァリエントではそれがすべてロシアであり、カスピ海以东では、一つのヴァリエントを除いてカルマクであることが明らかになった。

ノガイ版テキストAは、カザンを攻める敵が何であるかとくに明言せず、ただ「敵」として現れる。このように敵がいかなるものであるかを明記しないヴァリエントは他にもあるが、カザンでショラなどカザン・ハン国勢が敗北すること、敵に敗れてから統治者が代わったと述べていること、またカザンにノガイの呼びとがやってきたこともうたわれているが、その中に実在した反ロシア派の人物カ

(9) 坂井弘紀「中央ユーラシアの叙事詩に謡われる「ノガイ」について」『東欧・中央ユーラシアの近代とネイション1』北海道大学スラブ研究センター、2001年、42-43頁。

ズ・ミルザがいることから、明らかにロシアによるカザン攻略を歌っているといえるだろう。ソ連時代に採録されたノガイ版のこのテキストには、当局の「検閲」があったことが当然考えられる。もし主人公の戦う敵をロシアとしていても、「長兄」であるロシアと戦うことは認められず、削除されたであろう。ロシアと戦った英雄を描いた英雄叙事詩『エディゲ』がソ連時代には「封印」されていたことから、ロシアを敵と明記していたが、削除されてしまったという可能性は低いと考えられる。

またノガイのテキストBでは、カザンが登場せず、クリミアの戦士とともに敵と戦う。その敵はデヴ（巨人）である。デヴとは、非道な行ないをする邪悪な超自然的な存在として中央アジアや西アジアに伝わっている。この作品の叙事詩のヴァリエントでは、敵として、ロシアやモンゴル系遊牧民など実在する民族・集団が登場する。しかしながら、敵が超自然的な存在のデヴであることはテキストBの叙事詩と異なる昔話としての特徴を意味する。

一方、カラカルパク版にはさまざまな敵が登場するが、「民族」として現れる場合、ロシア、あるいはそれに類する言葉は全く現れない。そのかわりにカルマクという言葉が現れる。モンゴル系オイラトの遊牧集団を意味するカルマクの侵

表2 父の居場所とカザン・ハン、カザンを攻める敵（丸囲み数字は表3のテキストに対応）

テキスト	父の仕えるハン	父の居所	カザン・ハン	カザンを攻める敵
①		Krīm, Kara		Rus
②	Canbek	Kīrīm, Kōkūshulu	Çig(f)ali Han	Moskof
③		Kōkushlu- Tama	Çigali	Kazak
④	Canībek		Çigali Kan	Māsku
⑤				
⑥				Rus
⑦				Orus/Kazak
⑧	Canbek Han	Kīrīm, Gōkdām	Çagan	Rus/Moskova
⑨				Kazak/Rus
⑩				Orus/Rus
⑪		Kōkishli Tama		(敵)
⑫	Kaziy Bi	Hacitarhan, Kīrīm	Shagali Han	Urīs
⑬	Kadī Bey Mirza	Astrahan	Shagali	Rus/Mosko
⑭		Örgäniç		Orīs
⑮	Älimhan	Nogayli-Türikmen	Älimhan	Qalmaq
⑯	Älimhan	Nogayli-Türikmen	Älimhan	Qalmaq
⑰		Nogayli		Qalma
⑱				Qalmaq
⑲				(敵)
A		(Kīrīm)		(敵)
B				Dāv (デヴ)
C	Sultanī Sanjarī Mazīqan	Kōgis-uli Tama	Ädilhan/Polathan	Qalmaq

攻が激しかった中央アジアでは、ロシア、あるいはそれを連想させる敵ではなく、カルマクがロシアにとって代わって、伝えられてきたのである。以上のことから、敵民族については、カスピ海より西に伝わるヴァリエントがロシア、東に伝わるものがカルマクと分けられることが再確認できたといえよう。

さて、カラカルパク版ではカルマクのほかにも敵民族として「クタイ＝コタン」なる集団が描かれている。他のヴァリエントでは、このような集団が現れることはない。史実を鑑みると、カザンを巡る攻防で「クタイ＝コタン」なる集団が関係したことはなく、またカラカルパクの歴史においても、このような名称の集団がなんらかの動きを見せたことは知られていない。クタイとは中央アジアのテュルク系諸語で中国を意味する言葉であるが、クタイという集団は、マングトやキプチャクなどとならんでカラカルパクの下位集団としても存在する⁽¹⁰⁾。「クタイ＝コタン」が「中国」や「ホータン」と関係があるのか、実際の「民族」や地名であるのか、あるいはそうではないのかは今後検討の余地がある。異教徒でありムスリムに改宗したとあることから、東方の非ムスリムを意味するのかも知れない。他のヴァリエントには見られないこのような集団が描かれていることは非常に興味深く、カラカルパク版の特徴の一つであるといえよう。

なおグループⅠには、アメリカの研究者パクソイが指摘するように⁽¹¹⁾、クリミア版のいくつかのヴァリエントのようにロシアによるカザン攻略に関する実証的な史料となりうるヴァリエントも存在するが、あらすじからもわかるように、カラカルパク版は、ロシアについては言及がされないうえ、カザンに関する具体的な描写が少なく、カラカルパク独自のエピソードや登場人物が多いことから、カザン攻落についての史料にはなりえないことを指摘しておきたい。

7——作品に登場する地名

『チョラ・バトゥル』の各ヴァリエントを特徴づける要素の一つとして、作品中に現れる地名がある。ほとんどのヴァリエントに現れる地名カザンの他にも、たとえば、クリミア版などではクリミア半島やエディル川流域、カザン版や北カフカース版では、クリミア、エディル川流域に加えて、北カフカースのダゲスタン地方やカスピ海北岸の町アストラハンなどが舞台となっている。またカザフ版では、現ウズベキスタン共和国西部、ホラズム地方の町ウルゲンチや「ノガイ＝トゥルクメン」の地、ノガイ（ノガイ・オルダ）などがその舞台となっている。このように、各ヴァリエントには、それらが伝えられ、語られている地域と関係

(10) Мәмбетов, Камал. Қаракалпақлардың этнографиялық, тарихы, Нөкіс, 1995, 29-30-б.

(11) Paksoy H. B. Chora Batir: A Tatar Admonition to Future Generations, *Studies in Comparative Communism*, 19(3)and (4), 1986.259-260.

の深い場所が作品の舞台として描かれている。

ノガイ版では、テキストAにはまずチョラの住所としてクリミアが登場し、そこから旅立つ先としてカザンが現れる。これらは他のほとんどすべてのヴァリエーションと共通する。またチョラが最期を迎える場所はヴォルガ川で、これも多くのヴァリエーションに出てくるものである。テキストBには地名はほとんど現れず、唯一クリミアが出るのみである。既述のように、カザンを重要な舞台とするこの作品にカザンが現れないのは奇妙でさえあるが、昔話としてノガイの人びとに伝えられるうちに、彼らにとってカザンよりも地理的・心理的に近い存在のクリミアが主たる舞台となってしまったのであろう。

カラカルパク版には、カザン以外ではジェイフン（アム）川やノガイなどの地名が現れる。これらはカラカルパク人と関係が深い地名である。カザフ版にもしばしば現れる「ノガイ」とは「ノガイ＝オルダ」あるいはそれを構成する人びとを指すと理解してよかろう。現在のカザフ人、カラカルパク人、ノガイ人、バシコルト人、クリミア・タタール人などが彼らの子孫であり、「ノガイ時代」の記憶がこれらの民族に現在まで伝えられていることは、叙事詩の内容を見れば瞭然である。それらのうち、いわゆる叙事詩の形をとるものの一群は、「ノガイ大系」といわれ、『チョラ・バトゥル』もその中の一つと考えられている。

なお、カラカルパク版では、ショラがショラハン Шорахан なる町を治めていることが描かれているが、現在もショラハンという地がカラカルパクスタン共和国のトルトクル地区にあるという。かつてここにショラが町を作り、ここを治めたという伝説も伝えられていることを根拠に、カラカルパク人研究者には「ショラ＝バトゥルはカラカルパク人である」とする説を唱える人もいる。この意見は我田引水に過ぎると思われるが、物語がこの地に定着し、自らのアイデンティティを認識させる役割を果たした時に、新たにその土地の伝説として生まれ変わったことを証している。このように作品上の登場人物が、現在でも中央アジア各地でその土地に固有の「民族英雄」と見なされていることは、現在の「民族」と「英雄」との関係を考える上で興味深い事例である。たとえば、中央ユーラシアに広範に伝わる英雄叙事詩『アルパミシュ』の舞台であるジデリ・バイスンなる地がどこに位置するかという問題については諸説あるが、現在ではウズベキスタン共和国南部スルハンダリア州の町バイスン（ボイスン）に比定され、定説となっている。ウズベクのみならずカザフやカラカルパクにも広がる作品の舞台のある地点に断定してしまうことは不自然ではあるが、このことも「民族」や国家と「英雄」との現代的な関係を示す好例である。

さて、上述のように、『チョラ・バトゥル』の多くのヴァリエーションでショラの出身部族としてタマなる集団が描かれているが、この集団は実在する集団である。カザフを構成する小ジュズには、タマという下位集団があり、そこに伝わる口伝の系譜によれば、この集団名はタマという人物に由来し、そのタマという人物は

表3 テキスト一覧

-
- ①『チョラバトゥル (Çorabatır / Çorabatır)』 [Кърымтатар.. халкъ агъыз 1991, Emel 1984]
 クリミア＝タタール版。語り手、ベクマンベト・クルマンベト。ザキル・ベキロフ
 編纂。韻散混交文。約700行。クリミア＝タタール語。
-
- ②『チョラ・バトゥル デスタン (Çorabatır Destani)』 [Hasan Ortekin 1939]
 クリミア＝タタール (カラスバザル) 版。ハサン・オルテキン編纂。韻散混交文。
 約600行。トルコ語。
-
- ③『チョラ・バトゥル (Чора Батыр)』 [Radloff 1896]
 クリミア＝タタール (カラス＝バザル) 版。ラドロフ採集。韻散混交。約500行。
 クリミア＝タタール語。
-
- ④『チョラ・バトゥル (Чора Батыр)』 [Radloff 1896]
 クリミア＝タタール (プク＝ホジャラル) 版。ラドロフ採集。韻散混交。約300
 行。クリミア＝タタール語。
-
- ⑤『チョラ・バトゥル (Чора Батыр)』 [Radloff 1896]
 クリミア＝タタール (バクチサライ) 版。ラドロフ採集。散文。約30行。クリミ
 ア＝タタール語。
-
- ⑥『チョラ・バトゥル (Чора Батыр) (あらすじ)』 [Янты дюнъя 1991]
 クリミア＝タタール版。
-
- ⑦『チョラバトゥル (Çorabatır)』 [Emel 30 1965]
 クリミア＝タタール (カラス＝バザル、ケツフェ版)。語り手、アブドゥッラヒ
 ム＝エロリ (ブルガリア、シュムヌ生れ。祖父はカラス出身)、ファフリ・ベルチ
 ン (ケツフェ近郊生れ)。韻散混淆文。約170行。クリミア＝タタール語。
-
- ⑧『タタール＝デスタン チョラ・バトゥル (Tatar Destanı Çorabatır)』 [Bozkurt]
 クリミア＝タタール版。ファト・ボズクルト編纂。クリムのテキストを①や②に依
 拠して編集。韻文。約900行。トルコ語。
-
- ⑨『ショラバトゥル (Shorabatır)』 [Yüksel 1989]
 クリミア＝タタール版。語り手、サドレッティン・ギュレル (ルーマニア、コンス
 タンツァよりトルコ共和国ポラトゥルに移住)。韻散混淆文。約250行。クリミア＝
 タタール語ポラトゥル方言。
-

⑩『チョラ・バトゥル (Çora Batır)』 [Is'haki 1935]

ダブルジャ版。語り手、アブドゥッラ (ルーマニア、コンスタンツァ近郊のタタール人村生れ)。サ阿德ット・イスハキ編纂。韻散混交文。約600行。ダブルジャ＝タタール語。

⑪『ショラ・バトゥル (Shora Batır)』 [Tural 1995]

ダブルジャ版。ナドゥレット-エンベル・マフムト編纂。韻散混交文。約1500行。ダブルジャ＝タタール語。

⑫『チュラ・バトゥル物語 (Чура Батыр Хикяте)』 [Tatar... 1984]

カザン＝タタール版。ベレジン採集。約470行。カザン＝タタール語。

⑬『チョラ・バトゥル クリム＝ノガイ版 (Çora Batır Kırım Nogay Rivayeti) (あらすじ)』 [Inan 1968]

クリム＝ノガイ版。語り手、オスマノフ・マゴメド・エフエンディ。

⑭『ナリクの息子ショラ・バトゥルの物語 (Бү хикәят Шора Батыр Нәрік ұғылынын, киссасы)』 [Диваев 1992]

南カザフ (シュムケント) 版。ディヴァエフ採集。韻散混交文。400行以上。カザフ語南方言。

⑮『ショラ・バトゥル ダスタン (Шора Батыр Дастан)』 [Шора... 1993]

南カザフ (ケンタウ) 版。語り手、ボラトベク＝エルデウレトウル。ケンタウで採集。韻文。約6300行。カザフ語。

⑯『エル・ショラ (Ер Шора) (あらすじ)』 [Бердібай 1995]

カザフ版。語り手、ムサベク＝バイザコフ。アシルハン・オспанウル採集。約7000行。カザフ語。

⑰『ナリク (Нәрік)』、『ショラ (Шора)』 [Батырлар... 1989]

西カザフ版。語り手、ムルン・ジュラウ。ヌルマガンベトヴァとスディコフの編纂。韻散混交文。3000行以上。カザフ語。

⑱『ナリク・バトゥル (Нәрік Батыр)』 [Ертегілер... 1989]

採集地、カザフ草原。アレクトロフ採集。散文。約200行。カザフ語。

⑲『バトゥル・ショラについての話 (Батыр Шора туралы аңыз)』 [Залесский 1991]

西カザフ版。ザレスキーはアルル地方遠征隊に参加したポーランド人。250行。カザフ語。

表4 エピソード・モチーフ一覧

エピソード・モチーフ	テキスト（丸囲み数字は表3のテキストに対応）																			
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑲	A B C
a. ナリク、ハンの宮殿で異国からの 隊商にその才能を認められる	○	○						○												
b. 幼少のナリク、狩りに出たハンに 拾われ養われる												○	○							
c. ナリク、妻を選ぶ旅に出る	○	○	○	○				○		○	○			○				○	○	
d-1.ハン（あるいはその息子）、ナリク の妻を奪おうと策略を企てる	○	○	○	○				○		○	○	○	○	○				○	○	
d-2.ナリクの妻、「獅子の逸話」で奸計 を切り抜ける	○	○	○	○				○		△	△	○	○					○	△	
e. ナリク、故郷を離れ、新たなくに へ移動する	○	○	○	○						○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
f. ナリク、息子を忠実な下僕にちな んで、チョラと命名する	○											○						○		
g. チョラ、各地を廻る修行僧をもて なす	○	○	○	○				○	○		○	○						△		
h. チョラ、家族を侮辱したアリベイ を戦ったすえに殺す	○	○	○	○				○	○	○	○	○	○	○	△	○	○	△		○
i. チョラ、盟友と知り合い、行動を ともにする	○	○	○				○	○			○	○	○	○			○		○	○
j. チョラ、カザンへ行く	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	△	○	○
j-1. チョラ、弓矢を放ち、カザンの宮 殿に矢を突き刺す	○	○	○	○				○	○	○	○									
k. チョラ、カザン＝ハンの娘からの褒 美に満足せず、出陣を躊躇する	○	○		○				○	○	△	○									○
l. 困窮したナリク、チョラを訪ね、 カザンに来る												○	○	○						○
m. 敵の少女がチョラと結ばれ、息子を 産む。チョラの息子はチョラと闘う	○						○	○	○		○	○	○	○						
n. チョラの守護霊である竜が現れる					○	○				○	○								○	
o. チョラ、敵と戦い、エディル川に て死ぬ。(悲劇的結末)	○	○		△		△	○	○	△	△	○	○	○						○	△
p. チョラ、敵を破って、無事故郷に 帰還する。(大団円の結末)															○	○	○		○	○

ショラの三代前の人物であるという⁽¹²⁾。また、カザフのヴァリエントでもタマはナリクの祖父として描かれており、さらにほとんどのクリミア＝タタール版においても、チョラはタマという集団で成長したと謡っている。タマという集団は、カラカルパク版テキストCにも「カラブウラ⁽¹³⁾とコギスの息子タマを先祖にもつタマ族」として登場することから、『チョラ・バトゥル』がタマという集団と密接な関係をもつ作品であることが、カラカルパク版によっても改めて確認できたのである。

——おわりに

筆者がかつて行なった『チョラ・バトゥル』の各ヴァリエントの分類方法に照らすと、カラカルパク版はどのように分類されるかここでまとめてみよう。

まず、ノガイ版テキストAでは、多くの固有名詞がカスピ海以西のヴァリエント（グループI）のものと共通する点、主人公がカザンでの戦いの末、エディル川（ヴォルガ川）で死ぬことなどから、グループIに分類するのが適切である。さらに、チョラの愛馬の名称がカラゲルということや父ナリクが困窮のあまりカザンの息子を訪ねるという逸話があることから、グループIのうち（2）のエディル（ヴォルガ）川流域・北カフカースに分類するのが適当である。これは先行論文における筆者の分類法を補うものである。

次にテキストBはシンプルな昔話であり、叙事詩の他のヴァリエントと比べて異なる点が多いが、グループIに多く見られる「妃から賜与された刀」のエピソード（表4、k）の存在や結末のグループIIとの近似などから、まさに二つのカテゴリーの境目にあって、双方が混在した特徴をもっていると言え、興味深い。

テキストC（カラカルパク版）には、グループIに多く見られる「主人公が入水して最期を遂げる」というエピソードがあるものの、敵民族をロシアではなく、カルマクとしているという点、および、グループIに見られるあらすじや固有名詞の一定の共通性に乏しいという二点からグループIに分類するのは不合理であると考えられる。次に、敵がカルマクであったり、主人公が「ノガイ」のために戦ったり、また敵に勝利してカザンから帰郷するなど、グループIIの多くのヴァリエントとの共通性があることから、このカラカルパクのヴァリエントはグループIIに分類することが妥当であると考えられるだろう。

以上のことから、テキストA（ノガイ版）はグループIに、テキストC（カラカルパク版）はグループIIに分類することが適当であるとの見解を得ることがで

(12) Маданов Хамит, *Кіші жүздің шежіресі*, Алматы, Атамұра, 1994, 1016.

(13) カラブウラは、タマに伝わるウラン（関の声）である。ウランは戦いの際に部族の団結や戦意の高揚のために叫ばれるもので、各集団によって異なり、その多くは部族の著名な先祖や戦士の名前であった。

きた。このことにより、『チョラ・バトゥル』の諸ヴァリエントがカスピ海を東西に大きく二分できるという筆者の見解の妥当性が再確認できた。

また、ノガイのテキストBがグループIとII双方の特徴をもつことは、北カフカース・ダゲスタン地方が二つのカテゴリーの重なる点にあることを意味しているといえる。さらに、カラカルパクのテキストCで、主人公が海に入って死ぬことや主人公の馬の名称が北カフカースのヴァリエントと類似することなど、グループIIに分類されるカラカルパクのヴァリエントがグループIとも関連が深いことは、注目すべきポイントであり、やはりこの地域も二つのグループの重なる場所であると考えられ、中央ユーラシア・テュルク系叙事詩の研究の上で注目すべき点である。

ソ連邦崩壊と新国家建設の混乱が落ち着いてきた旧ソ連では、さまざまな民族文化の復興がなされ、英雄叙事詩もまさに復活したかに思える。今後もこれまで日の目を見ることのなかったテキストや新たに採録されるヴァリエントが現れるはずである。筆者の分類法が適当であるかどうか、これからも新たなヴァリエントを加味しながら、検討を続けていくことを今後の課題にしたい。それはテュルク諸民族の文化研究に不可欠な作業であるからである。

《参考文献》

- Ахметов С., Бахадырова С., Фольклорлық терминдердің қысқаша сөздігі, Нөкіс, 1992
Бердібай Р., Эпос - ел қазынасы, Алматы, 1995.
Давкараев Н., Очерки по истории дореволюционной каракалпакской литературы, Ташкент, 1959.
Диваев Әбүбәкір, Тарту, Алматы, 1992.
Залесский Бронислав, Қазақ сахарасына саяхат, Алматы. Өнер. 1991.
Ер Шора : қарақалпақ халық дастаны, Нөкіс, 1995.
Ертегілер 4, Алматы, 1989.
Жирмунский В. М., Тюркский героический эпос, Ленинград, 1974.
История каракалпакской литературы, Ташкент, 1994.
Батырлар жыры 5: Қырымның қырық батыры, Алматы, 1989.
Қырымтатар халқы ағыз яраты джылыгы: хрестоматия, Ташкент, 1991.
Маданов Хамит, Кіші жүздің шежіресі, Алматы, 1994.
Мәмбетов, Камал, Қарақалпақтардың этнографиялық тарихы, Нөкіс, 1995.
Очерки по истории каракалпакского фольклора, Ташкент, 1977.
Сагитов И. Т., Қаракалпакский героический эпос, Ташкент, 1962.
Татар халық ижаты: дастаннар, Казан : Татарстан кітап нәшрияты. 1984.
Шора Батыр: дастан, Алматы. 1993.
Яңы дүнья. 1991 Август 28

Paksoy, H. B., Chora Batir : “A Tatar Admonition to Future Generations”, *Studies in Comparative Communism*, 19(3) and (4), 1986.

Radloff, W., *Proben der Volksliteratur der türkischen Stämme Südsibiren 7*, St, Peterburg, 1896.

- Bozkurt, Memet Fuat, *Tatar Destanı Çora Batur*, n.d.
Emel. 1965. 30 (Eylül-Ekim).
- Inan, Abdülkadir, *Makaleler ve İncelemeler*, Ankara: Türk Tarih Kurumu Basımevi, 1968.
- Is'haki, Saadet, *Çora Batır : Eine legende in Dobrudshatatarischer mundart.*, Kraków: Naklacedm Polskiej, 1935.
- Ortekin, Hasan, *Çora batırı : Destan*, İstanbul : Bürhaneddin Basıevi, 1939.
- Tural, Güzin, Çora Batır Destanı'n Kırım Varyantları ile Manas Destanı Arasındaki Benzerlikler, *Manas Destanı ve etkileri Uluslararası Bilgi şöleni*, Ankara: Atatürk Kültür Merkezi, 1995.
- Yüksel, Zühal, *Polatlı Kırım Türkçesi Ağzı*, Ankara: Türk Kültürünü Araştırma Enstitüsü, 1989.
- 坂井弘紀「テュルク英雄叙事詩の地域的特徴——『チョラ＝バトゥル』の分類をもとに」『地域研究論集』第3巻第2号、国立民族学博物館地域研究企画交流センター、2000年。
- 坂井弘紀「中央ユーラシアの叙事詩に謡われる「ノガイ」について」『東欧・中央ユーラシアの近代とネイション1』北海道大学スラブ研究センター、2001年。

[さかい ひろき]